



TITLE:

京大広報 No. 425

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 425. 京大広報 1992, 425: 255-264

ISSUE DATE:

1992-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209233>

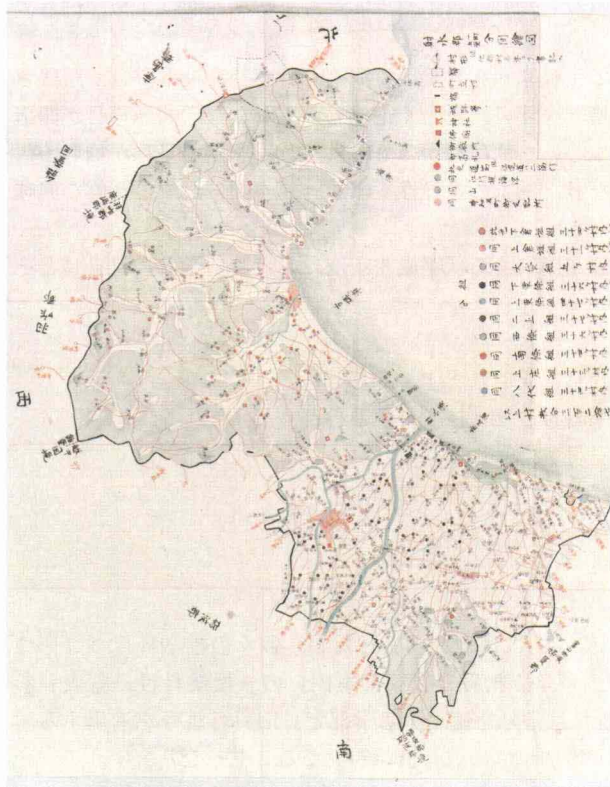
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 425

京都大学広報委員会



越中国(現富山県)射水郡を描いた縮尺7万2千分の1の手書き彩色地図 近世の測量器具による地形測量の様子の解説図
(左)射水郡一町五厘分間絵図(部分)文政八年(1825)(文学部地理学教室所蔵), (右)地方測量之図(部分)
嘉永元年(1848)(工学部資源工学教室所蔵) — 関連記事本文 257 ページ —

目次

<大学の動き>

- 教養部開講の「平成4年度における
全学共通科目」について……………256
平成4年度
京都大学文学部博物館春季企画展の開催……………257

<部局の動き>

- 化学研究所スーパーコンピューター
ラボラトリーが完成……………258

<紹介>

- 京都大学附属図書館……………258
日誌……………262

<随想>

- 回想の陳列館
名誉教授 越智武臣……………263

<コラム>

- 附属図書館の逸品「旭江文庫」
文学部教授 岩倉具忠……………264

<大学の動き>

教養部開講の「平成4年度における全学共通科目」について

京都大学では、さきに『京大広報』(No. 419 別冊, 1991.12.1)において報じましたように、平成4年10月1日に総合人間学部を創設、平成5年4月から、毎年130人の学生を受け入れることになりました。教養部は、平成5年3月末で廃止されることとなります。平成4年4月から現行の一般教育科目(人文、社会、自然科学系科目)、外国語科目、保健体育科目という全学的科目区分はなくなり、それに代わる授業科目として、「全学共通科目」が開講されます。その目的は、単に幅広い知識を修得するだけでなく、優れた独創性と柔軟で総合的な判断力を養い、将来の可能性と豊かな人間性を培う機会を提供することにあります。

平成4年度の全学共通科目は、移行措置として、従来から教養部で開講されてきた授業科目が踏襲されますが、平成5年度からは、総合人間学部の措置に伴い、新しく編成し直された全学共通科目が開講されることとなります。総合人間学部の科目を中心に、他部局からも提供される予定の科目が加わることによって、全学共通科目の内容は一層豊かになり、選択の多様性も広がり、学問に対する新鮮な興味を呼び起こすことが期待されます。

以下、平成3年度以前入学者を対象に、教養部が開講する「平成4年度における全学共通科目」とその履修について全般的な説明をします。

(I) 内 容

全学共通科目は、A群、B群、C群、D群から構成されます。それぞれ、

A群：従来の一般教育科目の「人文科学系科目」と「社会科学系科目」

B群： 〃 「自然科学系科目」

C群：従来の「外国語科目」

D群： 〃 「保健体育科目」

に相当します。

(II) 科目番号

全学共通科目は、従来の教養部開講科目と基本的には変わりませんが、個々の授業科目一つ一つに、別個の新しい科目番号が付けられました(『学修指針と教養部案内』の「授業科目一覧表」参照)。ただし平成4年度は、過渡期として、新科目番号を適用する学部と、旧科目番号を適用する学部が混在します。これに伴って、学部によって増加単位の取り扱いが異なることとなります。

- (1) 平成3年度と同じ「旧科目番号」を適用する学部：文学部、教育学部、医学部、薬学部、工学部、農学部
- (2) 「新科目番号」を適用する学部：法学部、経済学部、理学部

(III) 修得すべき全学共通科目数及び単位数

入学年度、学部によって、修得すべき科目数や単位数が異なりますので、詳細については、教養部の『学修指針と教養部案内』及び各学部の便覧・要覧をよく読んでください。

(IV) 増加単位の取扱

上記(II)に従い、増加単位の制度は、学部によって、以下のように異なります。

- (1) 「旧科目番号」を適用する6学部では、増加単位の制度は従来どおり存続します。
- (2) 「新科目番号」を適用する3学部のうち、
 - i) 経済学部及び理学部では、C群(外国語科目)を除いて、増加単位の制度は廃止され、既修得科目単位も含めて、すべての科目単位を卒業に必要な単位に数えることができます(同一科目を除く)。

- ii) 法学部では、C群(外国語科目)及び既修得科目を除いて、増加単位の制度は廃止され、平成4年度に修得するすべての科目単位を卒業に必要な単位に数えることができます(同一科目を除く)。

(V) C群(外国語科目)における増加単位の取扱

C群(外国語科目)については、すべての学部において、増加単位の制度は存続します(『学修指針と教養部案内』のうち、「授業科目一覧及び授業科目内容概略」の前文参照)。

以上が「平成4年度における全学共通科目」の概要です。平成5年度については、総合人間学部の発足に伴い、全学共通科目も多様化しますが、現教養部の授業科目との関係は、新旧科目対応表で明示するなど適切な措置が講じられます。また、各学部の定めるところにより、既修得単位は従来どおりに算定されること、さらに、上記移行措置は平成5年度以降も、必要とされるかぎり存続することはいずれもありません。
(教養部)

平成4年度京都大学文学部博物館春季企画展の開催

本学文学部博物館では、下記のとおり春季企画展「近世の地図と測量術」を開催いたします。本学の教職員・学生は無料です(学生証または職員証を呈示のこと)。

記

期 間 4月13日(月)～6月13日(土)

開館時間 月曜日～金曜日 9:30～16:30

土曜日 9:30～12:00

(入館は閉館30分前まで、日・祝日は休館)

場 所 博物館 企画・総合展示室(1F・2F)

展示内容

企画展「近世の地図と測量術」

今回の企画展示は、「近世の地図と測量術」をテーマとし、いくつかの小テーマを設定しつつ、近世末の日本における測量・地図作製の技術的展開とその成果をあとづけようとするものです。まず①「近世の国絵図」の小テーマの下で近世の国絵図・刊行図などの概要を示した上で、②「伊能忠敬の測量と地図作製」の状況を紹介します。次いで、その影響の下にさらに創意工夫を重ねて北陸地方の測量・地図作製を進めた③「石黒信由の測量と地図作製」の全容を紹介し、当時の技術・方法を解説すると共に明治の陸地測量部に継承される様子を示します。さらに、④「沿岸図・航路図と運河」、⑤「佐渡金山の測量と坑内図」の小テーマによって沿岸・坑内の測量・地図作製についても比較・展示します。展示史料は基本的には文学部博物館所蔵のものを中心としますが、足りない部分については他機関から借用した史料で補います。

近年は研究上も、一般的にも地図に関する関心が深まっていますが、今回の展示は国絵図から実測による地図への展開の過程を示すもので、和算・測遠術とともに近世のすぐれた地図作製技術を一堂に展示しようとするものです。近年の地図研究の成果を活かした展示によって、地図そのものと、江戸時代の技術とその明治時代への継承について、少しでも理解を深めていただくことを期待します。

なお、1階総合展示室では考古常設展示「日本古代文化の展開と東アジア」を行っています。

＜部局の動き＞

化学研究所スーパーコンピューター
ラボラトリーが完成

化学研究所に新規導入されたスーパーコンピューターシステムを収納した新しい研究棟スーパーコンピューターラボラトリー（本学宇治構内化学研究所附属核酸情報解析施設棟に隣接、2階建鉄骨構造延496㎡）の竣工披露式が、2月19日（水）井村裕夫総長をはじめ、学内外から関係者約130名の出席を得て、宇治地区共通大会議室において挙行された。

披露式は、午前10時30分から始まり、作花済夫化学研究所長の式辞、井村裕夫総長の挨拶、大矢誠施設部長の工事経過報告、金久 實教授のスーパーコンピューターシステムの紹介があった後、工藤敏夫文部省学術国際局研究機関課調整官から



祝辞が述べられた。

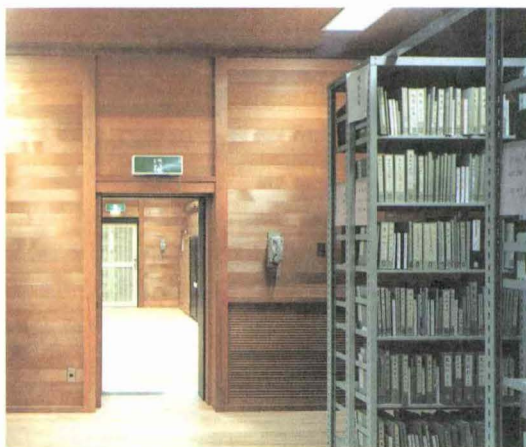
このあと、同ラボラトリーが出席者に披露されたのに引き続き、宇治地区共通大会議室において祝賀会が催され、堀 義和日本クレイ社社長の挨拶、西島安則前総長の祝辞があり、大井龍夫名誉教授の発声で乾杯し、終始なごやかなうちに午後1時30分閉会した。（化学研究所）

＜紹介＞

京 都 大 学 附 属 図 書 館

(1) 歴 史

京都大学附属図書館は、京都帝国大学の創立から2年半後にあたる、明治32年（1899）12月11日を創立の日としている。当時の建物は、一部を残して昭和11年（1936）1月に焼失した。二代目の建物は昭和15年（1940）1月に起工されたが、戦時下のため工事が中断され昭和23年（1948）2月に開館した。この建物は三代目（現在）の図書館が同一場所に建てられたため、昭和56年（1981）8月に解体された。現在の附属図書館は昭和59年（1984）4月に開館した。建物と蔵書数を中心に年譜を編むと次のようになる。



貴重書庫（地下1階）

簡略年譜

明治30年（1897）6月	京都帝国大学創立
32年（1899）11月	初代館長 島文次郎補任
32年（1899）12月11日	閲覧業務開始 この日を附属図書館創立の日とした
昭和9年（1934）2月	本学の蔵書数100万冊
23年（1948）2月	二代目、図書館竣工
34年（1959）2月	本学の蔵書数200万冊
41年（1966）4月	電子複写による文献複写業務の開始

昭和46年 (1971) 3月	本学の蔵書数300万冊
56年 (1981) 12月	本学の蔵書数400万冊
58年 (1983) 10月	三代目、図書館竣工 (現在)
60年 (1985) 6月	東大文献情報センター (学術情報センター) と接続
平成2年 (1990) 10月	OPAC/TSS (On-line Public Access Catalog)
3年 (1991) 9月	本学の蔵書数500万冊

(2) 現在の附属図書館

現在の図書館は、これまでの施設に比べて大幅に改善されている。2層の地下書庫は約100万冊の収容能力を持ち、そこには学内所蔵雑誌のためのバックナンバーセンターが設けられている。5万冊の収容能力を持つ貴重書庫は、校倉造りとなっており、空調防災の面も、十分に完備されたものとなった。そこには、170点の重要文化財をはじめ、国内国外の貴重な文献資料が納められている。平成3年秋には、あらたに鈴鹿本『今昔物語集』が貴重書として収められた。これは同諸本の祖本となるもので、その学術的な価値は高い。

重要文化財一覧 (39種170冊)

紙本墨書 万葉集 巻16 (尼崎本) 1帖 平安末鎌倉初期筆写
 紙本墨書 古今集注 20巻2帖 藤原教長撰 仁治2年 (鎌倉中期) 伝二条師忠筆
 清原家家学書 34種 紙本墨書 (南北朝から室町時代のものを中心とする)
 紙本墨書 兵範記 49巻 兵部卿 平 信範 長承元年 (1132)～承安元年 (1171)
 紙本墨書 範国記 1巻 平 範国 長元9年 (1036) 夏秋冬記
 紙本墨書 知信記 1巻 平 知信 天承2年 (1132) 春記

特殊文庫 現在17の文庫があり、その多くは貴重書や重要文化財の指定をうけている。

平松家本 朝廷の儀式典例、日記に貴重なものが多い。兵範記、範国記、知信記の三つの本は重要文化財指定のものである。また真名字本平家物語も著名。

清家文庫 明経道清原家に伝わった経書並びに日記秘伝を中心とする。清原家家学書34種は重要文化財である。中でも孝子伝は複製され広く紹介された。

近衛家本 著名な陽明文庫が設立された際、近衛家から3,150冊の典籍が本学に寄贈された。漢籍の他、宇津保物語、落窪物語、大鏡などの古写本もある。

谷村文庫 大正昭和の実業家谷村一太郎氏旧蔵の和漢9,200余冊の稀書である。新村出博士の縁で本学に寄贈され、光明皇后、伝桓武天皇写経など異色。

維新資料 吉田松陰の遺墨を中心に、維新の関係資料が多数ある。奇兵隊日記や大久保利通自筆「三藩盟約書草案」、平野国臣のこより文字などがある。

最近の貴重書

貴重書は和漢籍にとどまらず種々積極的に収集している。「スマトラのバタック文字写本」や、17～18世紀に北米で文字教育のために使われた「ホーンブック」(印刷面が角の薄皮で表面加工してある)、18世紀に初めてアフリカのニジェール川内奥部に到達した「マンゴ・パークの探検記」、あるいは精緻な鳥瞰図「テュルゴのバリ地図」など枚挙にいとまがない。

主な刊行物

京都大学附属図書館報『静脩』, 年4回発行

京都大学蔵『大惣本目録』, 3分冊 (1988～1990)

利用者への配慮も全館施設にみられ、年間64万人以上の利用に対応している。

△地下書庫

地下1Fには約25万冊の収容力をもつ積層式書架に、内外雑誌や京都大学博士学位申請論文を収蔵する。最深の地下2Fには約75万冊収容可能な集密書架に、バックナンバーセンターと特殊文庫を置き、また50万冊の和洋図書を収蔵している。

△貴重書庫（地下1F）

5万冊の収納力がある貴重書庫は、24時間連続の空調設備をもち、内部はブナと米杉の板張りとなっている。とくに壁面は板を落とし込みにしており、いわゆる校倉造りとなっている。このため結露、湿度変化への対応は万全である。本館だけではなく、いまなお学内に埋もれる珍しい資料が発掘される可能性に対して、附属図書館の貴重書庫は充分に応じられるものである。

△玄 関

吹き抜けを見通す遮光ガラスの玄関ポーチには、20㎡の自動ドア付き風除室があり、夏冬ともに快適な空調効果を約束する。重厚な煉瓦タイル張りの玄関に立ったとき、歴史と伝統への信頼感がもたらされる。

△メインカウンター

ゲートで利用証を挿入し、入った所にメインカウンターがある。館内のほとんどのサービスはここで行っている。七つに分かれた各セクションでは、インフォメーション、図書雑誌の出納、複写サービス、参考調査等の機能をはたしている。

△1階開架閲覧席

約300弱の席数をもち、3万冊以上の参考調査資料や、1,500誌の新着学術雑誌コーナーがある。雑誌は工学部所蔵の化学系、本館の一般誌、理工学系外国雑誌センターとして収集しているものなど、多彩である。ほかにCD-ROMソフトも和洋10種以上ある。

△2階開架閲覧席

全館約900席のうち、ここ2階閲覧室には約600席が用意されている。中心にユティリティー、ラウンジ、吹き抜けなどを集め、その周辺に書架をセットしたコア様式により、閲覧席は自然光を十分に得られる仕組みになっている。

△3階展示ホール

これまで、近世京都展、洋学史資料展、搖籃期の京都大学、近世人の読書、ジャーナリズムの源流、維新資料展、和漢書古典籍のさまざま、近代ヨーロッパ思想の歩みなど、貴重書や特殊コレクションをテーマ別に展示してきた。平成3年秋には「東アジアの文字と文献」が開催され好評を博した。

(3) 情報サービス

本館の情報サービスは内外の学術情報システムの成長と相応し、大きく飛躍した。現在、学内外の150台を上回る端末機が本館の電子計算機に、LAN (KUINS) を通して接続されている。それら端末機を通じた目録検索をはじめとするサービスは、今後とも改良拡張するように検討している。

△オンライン目録検索用端末機

利用者用に十数台の端末機が用意されている。京都大学及び近畿北部地区国立大学が入手した図書及び雑誌の所蔵情報を検索できる。他に、CD-ROM 検索用のパーソナルコンピュータも数台用意されている。

△コンピュータ

ホストコンピュータ (FACOM M-360) は 24 Mb の主記憶、15 Gb の外部記憶装置を実装している。これを利用している端末機は、学内133台、近畿の5大学29台である。近畿北部地区データベースの構築と利用、受入予算管理などに使われている。

(4) 諸統計表

主な利用対象者数 (平成3年5月1日調)

学部学生	大学院学生	教 職 員	合 計
12,977人	4,259人	5,476人	22,712人

年間総入館者数 (平成2年度)

学 内 者	学 外 者	合 計
642,336人	1,694人	644,030人

蔵書数 (平成4年1月1日調)

() 内は附属図書館内数

和 書	洋 書	合 計
2,594,629冊 (478,671)	2,432,249冊 (255,394)	5,026,878冊 (734,065)

年間増加冊数 (平成2年度)

和 書	洋 書	合 計
44,652冊 (7,172)	74,870冊 (2,452)	119,522冊 (9,624)

雑誌所蔵種類数 (平成3年5月1日調)

和 雑 誌	洋 雑 誌	合 計
28,232種 (9,159)	33,745種 (9,701)	61,977種 (18,860)

経常費 (平成2年度)

図書購入費	図書館運営費	総 計
145,594千円	146,775千円	292,369千円

(5) おわりに

平成3年(1991)秋、京都大学の全蔵書冊数は500万冊に達した。創立以降百年近い期間に、先学や図書館関係者が収集に努力した賜物といえる。近年、大学(院)設置基準の改正にみられるように、大学全体の姿が大きく変わろうとしている。500万冊の資料は、情報の発信源としての本附属図書館が、新たな学術環境に寄与していくための原資となるものである。これを次の世代に継承することもまた、本館の最大の責務であるといえよう。

(6) 付 録

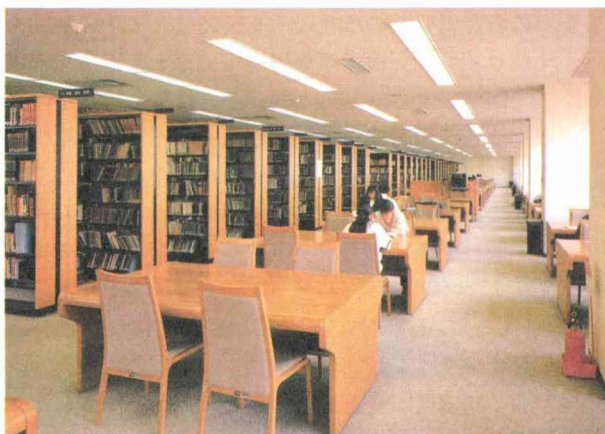
図書館の機能

資料の提供 (附属図書館・館内資料として約70万冊所蔵)

教養図書 (一般教養図書や学習図書を約7万冊開架)



メインカウンター



2階開架閲覧室



コンピュータ機器室(4階)

- A V 資料 (英独仏露中日の語学学習テープ・ビデオテープ)
- 研究資料 (各種資料を、全分野にわたって全学的な利用に供する)
- 参考調査資料 (約 3 万冊の資料が参考資料コーナーにある)
- 各種コレクション (17 点のコレクションを特殊文庫として整理)
- 貴重図書 (図書や標本, 特殊文庫の多くが貴重書保管)
- 重要文化財指定 (39 種, 170 冊の図書が指定を受けている)
- 学術雑誌 (工学部所蔵の化学系約 400 誌と本館所蔵の約 100 誌)
- 理工学系外国雑誌センター (国内所蔵の希な約 1,000 誌の外国雑誌)
- マイクロ資料 (フラフ資料, 新聞, 貴重図書などがマイクロ化)
- フラフ資料 (Human Relations Area Files) (世界の人類学・民族学・社会学・言語学関係資料)
- 情報の提供 (学内, 近畿北部, 学術情報センターとのネットワークを結んでいる)
- 調査の援助 (書誌情報調査や, 図書館利用の援助)
- 資料の所在 (資料の所在場所を確認し, 入手の援助をする)
- オンライン目録検索 (専用端末で京大と近畿北部国立大学の資料検索)
- OPAC/TSS (上記オンライン目録を研究室のパソコンから検索)
- オンライン情報検索 (学術情報センターや商用データベースを校費検索)
- 総合目録カード (非オンラインの図書のための全学図書総合目録)
- 情報の入手 (国内及び諸外国主要図書館の資料情報を入手)
- 図書館相互協力 (文献複写サービスなどの図書館間相互協力参加)
- ニューメディアのサービス (ニューメディアにも迅速に対応している)
- CD-ROM (内外の二次資料やその他新聞記事を自由に検索)
- オンライン雑誌目次提供 (KUINS で宇治に新着雑誌目次イメージ情報の試験提供)
- 展示会・講演会 (貴重資料を中心に, テーマ別に年 2 回公開)
- 保存の機能**
- 貴重書庫 (24 時間恒温恒湿防火設備付きの貴重資料保管書庫)
- バックナンバーセンター (学内所蔵のバックナンバーを約 7,500 誌保管)
- 利用の機能**
- 入退館の簡易性 (図書利用証の挿入で入館。退館は自由である)
- 貸出・返却の簡易性 (開架図書の手続きはコンピュータで迅速にできる)
- 情報の集中化 (メインカウンターでほとんどの手続きが可能)
- 開架書架 (多くの新着図書を, 自由に手に取って利用できる)
- 調整の機能**
- 図書館(室)の協力調整 (学内 64 箇所 of 図書室間の相互協力などの連絡調整)
- 近畿北部地区ネットワーク (近畿北部国立大学附属図書館の情報処理センター)

日 誌

(1992 年 2 月 1 日～2 月 29 日)

2 月 4 日～7 日	18 日	京都大学後援会助成事業検討委員会
平成 3 年度京都大学技術職員研修 (第 7 回)	19 日	化学研究所スーパーコンピュータラボラトリー竣工披露式
5 日		ポーランド共和国 Tadeusz Diem 教育省次官
他 1 名来学, 総長と懇談	21 日	総長, 職員組合との交渉に出席
12 日	25 日～26 日	国際交流会館委員会
〃		国際交流委員会
18 日	28 日	評議会
		入学者選抜学力試験 (前期日程試験)
		京都大学附属図書館商議会

洛書

西欧文明をその文化史的背景の中で理解しようとするとき、この文明の根源にある古典古代と中世末期からルネサンスにかけてのイタリアの文化をまず視野におさめる必要のあることは、議論の余地のない「常識」に属することであろう。ところが現代の日本には、この「常識」は通用しない。というのはそうした「常識」を育てる素地がないからである。現にどの大学でも学べる西欧の言語は、英独仏の三か国語に限られている。今もって日本人の描く西欧像のなかで圧倒的な地位を占めているのは、この三国にはかならない。西欧の他の多数の国々は、なぜ抜け落ちてしまったのか。この明らかにゆがんだ像に対して、当然起こるべき疑問があまり真剣に問題とされてはいないようだが、実はこの像の形成には、歴史的な背景があった。富国強兵を旨とする明治政府が、当時の列強であった三国をたまたま手本にしたためである。もうひとつ理由がある。科学・技術の輸入に急であるあまり、その依って来たる文化的背景がなおざりにされてきたことである。

附属図書館の逸品

こうした日本の状況の中で例外的に本学では、1907年の文学部創設以来、はやくからイタリア文学の重要性に着目し、研究を進めた先人が輩出した。上田敏や厨川白村等の英文学出身の学者たちである。このような恵まれた伝統に支えられて、1940年に日本で最初のイタリア文学講座の開設を見ることになる。イタリア文学研究の上で、さらにもうひとつ本学に幸いしたことは、同講座の開設と機を一にして、日本では他に類を見ないダンテ研究文献の一大蔵書の寄贈を受け、これが附属図書館に収められたことである。このコレクションが、大賀寿吉氏旧蔵の「旭江文庫」にはかならない。実は昨年京大広報の407号で取り上げた、附属図書館所蔵の「ダンテの胸像」もまた同氏の旧蔵になるものであった。

大賀寿吉氏(1870~1937)は、大阪の武田製薬に所属する経済人であったが、若い頃よりダンテに深く傾倒し、その研究に一生を捧げ、ダンテ関係の文献収集に情熱を注いだ。「旭江文庫」の名称は、同氏の故郷の岡山を貫流する旭川に由来する。

同文庫は、1502年から1936年までに刊行され

たダンテの著作の原典・原典の各国語訳書・研究書・学術誌を含む約三千点からなり、量的にも質的にも日本随一の蒐書である。文庫中の圧巻は何と言っても『神曲』である。写本・挿絵期本は集められていないものの、1502年のアルド版、1512年ランディーノ注解のスタンイーノ版をはじめとする千五百年代の主要な刊本が見事にそろっている。その他の世紀の刊本も重要なものは漏れなく集められており、総数約百八十点にのぼる。『神曲』以外の著作についてもその充実ぶりは大同小異である。原典の各国語訳はアラビア語やスロヴェニア語の『神曲』訳をも含む膨大な蒐集であるが、なかでも英語訳と独訳がもっとも充実している。

ダンテ研究の部門は、大賀氏の没年の前年にあたる1936年までの主要な研究書が、ほとんど網羅されている。さらに興味を惹かれるのは、いくつかの著作の「とびら」には著者の自筆署名や献辞がみられ、大賀氏と西欧のダンテ研究者を結ぶ友情の絆が跡づけられることである。たとえば近世イタリア哲学の泰斗ベネデット・クローチェや今世紀前半の英国におけるダンテ学の権威、パジェット・トインビーから贈呈された著書が挙げられる。

岩倉 具忠

興味本意の一介の好事家とはおよそ縁遠い、学者気質の大賀氏が、たゆまざる研鑽を通して培った鋭い鑑識眼で、一冊一冊丹念に、選び抜いたこの「旭江文庫」の特長は、何を措いてもその学問的水準の高さにある。したがってダンテ研究に携わるものにとっては、かけがえない貴重な宝庫にはかならない。それにしてもこれほど立派な蔵書の寄贈を受けながら、1936年以降のダンテ関係文献を系統的に集めることにより、大賀氏の遺産を継承発展させることのできなかった責任をわれわれはいま問われている。

来年度から教養部においても、イタリア語を選択必修科目とする授業が開講されることになった。本学でイタリア学に携わるものにとってはまさに朗報である。このことが日本における西欧像のゆがみを少しなりとも矯正するための糸口になることを希うものである。さらにこれが「旭江文庫」の真価を味わい得る遠い将来の研究者の養成にもつながるとすれば、大賀氏の大恩になにぶんか報いることができるであろう。(いわくら ともただ 文学部教授)